

報告

2003年度徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告

廣渡修一、曾田紘二、若泉誠一、森田秀芳、宮田政徳、森 和夫
(徳島大学 大学開放実践センター)

1.はじめに

本報告は、平成15年度徳島大学全学FD推進プログラムの概要を、実施した時系列に沿って構成したものである。編纂に当たっては、プログラム毎に概要と評価を掲載するほか、冒頭に全体的なプログラムの「ねらい」、末尾に「今年度の成果と課題」を置き、事業自己点検・評価書としての形式と実質を整えることを念頭においた。

2.本年度全学FD推進プログラムのねらい

平成15年度全学FD推進プログラムは、平成14年2月15日開催の大学教育委員会における決定「全学FD推進プログラム第1期計画(2002/4-2005/3)」に基づき、その第2年次として実施したものである。

さて、第1期計画(2002/4-2005/3)の目的は次のように規定されているので、再掲しておこう。

- ① 理念にとどまらず実践的な授業改善活動を行う。
- ② FD活動に体系性・組織性をもたせ、全学FDと学部FDの相乗効果を目指す。
- ③ 参加教官が将来のFD活動の中核的なメンバーとして育つことを期待する。

(1)全学FD推進プログラム

第2年次に当たる本年度においては、初年度の反省点を踏まえつつも、計画の着実な定着を図ることを主眼にして、大凡前年度の枠組みを踏襲して実施した。次の5つのプログラムがこれである。

実践的FDプログラム

a. FD基礎プログラム

新任教官(20~30名程度)を対象とし、1泊2日の日程でワークショップと全体討議を行い、徳島大学FD活動の理念、シラバス作成、講義計画、教授技術等について、演習、発表、研究討議を行う。

b. FD応用プログラム

FD基礎プログラムを受講した教官を対象として授業研究会を行い、基礎プログラムで習得した内容を実践的に高め、展開力と研究討議の方法を学ぶ。

c. FDリーダーワークショップ

各部局のベテラン教員を糾合し、全学的見地から本学におけるFDの理念と課題について探求する。なお、実施は基礎プログラムと並行して合宿研修として行う。

d. FD推進ハンドブック作成ワークショップ

各学部及び全学共通教育センターから推薦されたベテラン教員と大学開放実践センター教員によって「徳島大学FD推進ハンドブック」を開発する。

FDシンポジウムの開催

平成15年度の全学FDの各企画を集約し、また、全学共通教育、専門教育の垣根を超えた教官の情報交換と合意形成を図る。

これらのプログラム間の関係は、図1に示した。これら一連の実践プログラムの運営に当たっては、従前のFD研究企画ワーキンググループを解消し、大学教育委員会の下に徳島大学FD専門委

員会を新たに設置して臨んだ。なお、事業の円滑な推進を図るため、専門委員会の下に大学開放実

践センター教員による作業部会を設置し、基本計画の原案づくりに従事した。

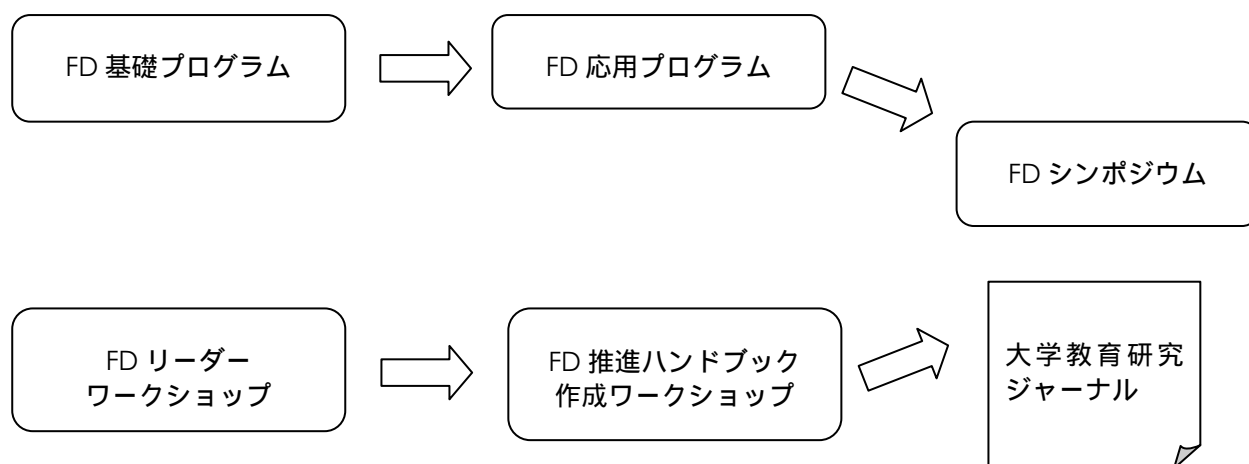


図1 平成15年度全学FD推進プログラムの関係

FD 専門委員会の構成は、次の通りである。

廣渡修一	大学開放実践センター	(委員長)
桑原類史	総合科学部	
安友康二	医学部	
中條信義	歯学部	
福井裕行	薬学部	
田中 均	工学部	
森 和夫	大学開放実践センター	
曾田紘二	大学開放実践センター	
金西計英	高度情報化基盤センター	
近藤裕子	全学共通教育センター	

(2)『大学教育研究ジャーナル』の発刊

なお、上記のプログラムの他、本年度より課題であったジャーナルの発刊に着手した。名称は『大学教育研究ジャーナル』に決定し、発行することにした。これに伴い、大学教育委員会の下に別途編集専門委員会を設置して、投稿規程等の策定、査読等に当たった。FD 専門委員会と同様、本委員会においても実働的な作業部会を設けて原案策定に当たることとした。

なお、ジャーナルの発行については、当初はWEB 上のみで立ち上げる計画であったが、WEB 上と並行して、本実施報告書と合本して発刊することとした。

FD 推進の各種プログラムと共に、各種の実

践活動を研究的視点でレビューするジャーナルがスタートすることにより、本学における全学FD 推進プログラムの全容が整った。

3.全学FD 推進プログラムの概要

3-1.FD 基礎プログラム

ここでは、採用、転入または昇任によって、新たに徳島大学で授業を担当されることになった教官を対象者として実施した、「FD 基礎プログラム」について報告する。

ねらい:

このプログラムは次の3点を目標に実施した。

- 授業を計画し、実施し、評価する方法を体得する。
- 授業研究の仕方を理解し、実践できるようにする。
- 他大学(愛媛大学)から講師を迎え、FD活動に関しての大学間交流を図る。

開催期日:

2003年6月7日(土)午前8時30分 徳島大学集合、2003年6月8日(日)午後6時00分 徳島大学解散

会場:

国立淡路青年の家(兵庫県三原郡南淡町阿万塩屋 757-39)

対象者:

参加者は以下の通りである。学部別に見ると、総合科学部 9 名、医学部 4 名、歯学部 3 名、薬学部 1 名、大学開放実践センター1 名、合計 18 名である。

注) 表中の番号は修了証番号である。

番号 A-2003-	氏名	所属
10-1001	山本真由美	総合科学部
10-1002	関澤 純	総合科学部
10-1003	鈴木和雄	総合科学部
10-1004	石田和之	総合科学部
10-1005	波場直之	総合科学部
10-1006	勝藤和子	総合科学部
10-1007	衣川 仁	総合科学部
10-1008	矢部拓也	総合科学部
10-1009	佐藤高則	総合科学部
10-3002	雄西智恵美	医学部
10-3003	上野修一	医学部
10-3004	松崎利也	医学部
10-3005	岸原健二	医学部
10-4001	野間隆文	歯学部
10-4002	誉田栄一	歯学部
10-4003	弘田克彦	歯学部
10-5001	石田竜弘	薬学部
10-6001	吉田敦也	大学開放実践センター

運営メンバー:

大学開放実践センター教官 6 名で運営した。

番号 A-2003-	氏名	所属
10-6002	曾田紘二	大学開放実践センター、FD 専門委員会委員
10-6003	森 和夫	大学開放実践センター、FD 専門委員会委員
10-6004	森田秀芳	大学開放実践センター
10-6005	若泉誠一	大学開放実践センター
10-6006	川野卓二	大学開放実践センター
10-6007	宮田政徳	大学開放実践センター

内容:

2 日間にわたって次頁のプログラムを実施した。

オリエンテーションに続いてワークショップを開始した。はじめのワークショップは参加者相互の親和を目指して「アイスブレイキング」を行い、グループ内で自己紹介をしながらグループの旗づくりをし、全体討議で各グループの紹介を行った。

2 番目のワークショップでは「徳島大学の FD の現状分析」というテーマのもとに、参加者が 4 つのグループに分かれ、あらかじめ用意した学生アンケート結果から、学生からみた「良い授業」、「悪い授業」をグループ毎に分析し、その結果を OHP シート 2 枚にまとめて、各グループ 3 分程度で発表した。

続いて愛媛大学の佐藤浩章先生から、「FD とは何か、何が求められているか」という題で、愛媛大学における FD と SD の連携、FD への学生参加の事例紹介と、将来への展望について講演していただいた。

第 1 日目の午後から 2 日目の午前にかけて、「共通教育科目の開発」を基本コンセプトに、参加者で構成された 4 つのグループが、それぞれ授業科目「死生学」、「新しい環境学」、「マンガ芸術論」、「ダイナソー考」を設定し、シラバスと講義計画書の作り方、成績評価の目的と方法、講義の進め方についてのミニレクチャーを受け、ワークショップを通じて、シラバス、講義計画書及び教材を作成し、2 日目の午後、これらの作成物によって、グループ毎に 15 分間の授業発表を行い、それに対する検討、討議を行った。

第1日(2003年6月7日・土曜日)プログラム

9:30 国立淡路青年の家に到着・記念写真撮影

(敬称略)

時刻	内容	講師	場所
9:30 - 10:00	・鍵の受け渡し、部屋の確認		特別第1研修室
10:00 - 10:30	(1)オリエンテーション ・徳島大学とFDへの期待、新任教官への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介	曾田紘二 学長 副学長 全学共通教育センター長 大学開放実践センター長	特別第1研修室
10:30 - 11:10	(2)WS=アイスブレイキング ・自己紹介 ・アイスブレイキング ・グループの旗作り・グループ紹介	森 和夫	特別第1研修室
11:10 - 12:10	(3)WS=徳島大学のFDの現状分析 ・学生アンケートに見る徳島大学教官の授業 ・授業はどう進めればよいか ・発表	曾田紘二 学長 副学長	特別第1研修室
12:10 - 13:00	昼食(12:00-12:20) 休憩		食堂
13:00 - 13:50	(4)講義「FDとは何か、何が求められているか」 ・国立大学におけるFDとは何か ・愛媛大学のFD・SDの現状と課題	講師(愛媛大学) 佐藤浩章	特別第1研修室
13:50 - 14:30	(5)講義「教育の計画から準備まで」 ・目標設定の仕方と評価 ・シラバス作成の仕方、講義計画の立て方	宮田正徳 森 和夫	特別第1研修室
14:30 - 14:40	コーヒープレイク		
14:40 - 16:00	(6)WS=「共通教育科目の開発Ⅰ」 ・シラバスを作成する ・講義計画を作る	宮田正徳 森 和夫	特別第1研修室
16:00 - 16:40	(7)講義「よりよい成績評価の仕方」 ・成績評価の目的 ・評価の方法と評価対象 ・試験問題の出し方	若泉誠一 川野卓二	特別第1研修室
16:40 - 18:00	(8)WS=「共通教育科目の開発Ⅱ」 ・シラバスを作成する ・講義計画、評価計画を作る	若泉誠一 川野卓二	第2~5研修室
18:00 - 19:30	夕食 風呂他(入浴時間16:00~22:00)		食堂・浴室
19:30 - 21:00	(9)WS=「共通教育科目の開発Ⅲ」 ・授業づくり、指導案づくり	大学開放実践センター 教官全員	第2~5研修室
21:00 - 22:00	懇親会		特別第1研修室
22:00	消灯		宿泊室

第2日(2003年6月8日 日曜日)プログラム

時刻	内容	講師	場所
- 7:10	朝の散歩		吹上浜
7:10 - 7:20	朝の集い		つどいの 広場
7:30 - 9:00	朝食(7:30-7:50) 8:45 部屋点検・退室・朝の散歩		食堂・ 吹上浜
9:00 - 9:40	(10)講義「良い講義の進め方」 ・講義の準備から評価まで ・講義の工夫 ・双方向性の確保	曾田紘二 金西計英	特別第1 研修室
9:40 - 11:50	(11)WS＝「共通教育科目の開発Ⅳ」 ・授業づくり、指導案づくり	大学開放実践センター 教官全員	第2～5 研修室
12:00 - 13:00	昼食(12:00-12:20) 休憩		食堂
13:00 - 15:30	(12)演習「授業づくりと教材研究」発表会 [15分発表+討議・検討10分]×5G ・授業研究会の進め方 ・検討と改善ポイント	森田秀芳 金西計英 大学開放実践センター 教官全員 全学共通教育センター長 大学開放実践センター長 FD 専門委員	特別第1 研修室
15:30 - 15:50	コーヒーブレイク		
15:50 - 17:00	(13)WS＝「プログラムのまとめ・これから」 ・学習したこと、得たこと・これからどう仕事に生かすか・表彰式・グループの解散式 (14)リーダーチーム討議結果報告(報告者から) (15)アンケート (16)おわりの言葉、青年の家からの挨拶	森 和夫 川野卓二 副学長 FD 専門委員	特別第1 研修室
	17:00 バス発車→18:00 常三島キャンパス着		

成果:プログラムの到達目標に対する達成度について

[到達目標 : 授業を計画し、実施し、評価する方法を体得する]

授業担当者は、授業という教育活動が「目標設定、目標実現のためのシラバスと教材の作成、授業実施、授業評価」から成る一連の流れによって構成されていることを意識し、さらに、これらのことを実際に実施できる力をつけることが重要である。「FD 基礎プログラム」は、講

義とワークショップ及び授業発表によってこの目標を達成しようとするものである。

残念ながらプログラムのこのような意義と目標を十分に理解されていない参加者も見受けられた。このことが、グループ毎に独立して作業の出来るワークショップ室を十分に確保出来なかったことと重なって、作業への集中度にグループ間の差が生じ、これが授業発表の出来映えにもつながった。長時間にわたるワークショップの成果を感じさせる手堅い発表があ

った一方で、安易に流れた発表もあった。上記のように、4つのグループは授業科目として、それぞれ「死生学」、「新しい環境学」、「マンガ芸術論」、「ダイナソー考」を設定したが、そのテーマによって何を伝えようとするのか、詰めあまい発表もあった。

運営側の問題としては、プログラムの目指すところをはじめに参加者に十分に伝え、また集中して作業に取り組める環境を整える必要があった。

限られた時間と環境の中での作業であり、十分に目標を達成したと言えない面もあったが、授業準備から実施までの過程を実践的に経験するプログラムとして有意義だったと言える。

【到達目標：授業研究の仕方を理解し、実践できるようにする】

プログラムの最後に、各グループがワークショップで制作してきた授業を発表し、その発表をめぐって授業研究会を行った。授業研究会は次の手順で行った。

- (1) 授業発表グループのメンバーによる授業内容の紹介
- (2) 模擬授業の形で授業発表
- (3) 発表グループ以外のグループ代表(コメンテーター)によるコメント
- (4) 全体討議

ほとんどの参加者は、このプログラムによってはじめて「授業研究会」を経験したと考えられる。従って、授業研究会の手続きを知り、その手続きに従って実際に授業研究会を行ったことに意義がある。このような経験によってはじめて自分の授業を対象化し、意識化できるからである。他方、コメンテーターや討議参加者にとってどのような点をチェックすればいいのかははっきりしないところもあり、経験不足からくる限界も感じられた。しかし、「授業研究会」は、10月から12月にかけて計画されている「FD応用プログラム」に引き継がれ、ここでは、FD基礎プログラムの参加者が行う徳島大学での実際の授業について検討会を行う。このような展開を通じて授業そのもののブラッ

シュアアップを図るとともに、「授業研究」についての認識と実施方法を、一層確かなものとして身に付けることが出来る。

【到達目標：他大学から講師を迎え、FD活動に関しての大学間交流を図る】

愛媛大学の佐藤浩章先生から「FDとは何か、何が求められているか」という題で講演していただいた。愛媛大学で実施されているFDとSDの連携及びFDへの学生参加について話された。この2点は今後徳島大学としても取り組むべき重要なテーマであり、紹介された事例に啓発され、参加者は大きな感銘を受けた。

愛媛大学との交流は「FD大学間ネットワーク」として、愛媛大学、徳島大学をはじめ、香川大学、高知大学、山口大学、長崎大学、名古屋大学、室蘭工業大学が参加するネットワークに発展し、2003年12月13、14日に愛媛大学で「第1回FD大学間ネットワーク会議」が開催された。

・計画から実施までの経過と改善について

ミニレクチャーとワークショップ及び授業発表などの実践の組み合わせはプログラムとして良かった。また、今年は、授業作成資料として8テーマの雑誌を用意し、その中から各グループが一つずつ、計4テーマを選択した。テーマに関して選択可能にしたのは前年度に比べて良かった。

今年度はパソコン、液晶プロジェクター、OHP等の機器を準備し、これらの機器はおおむね機能した。しかし、OHPシートや模造紙による発表と比較して、パソコンとプロジェクターによるプレゼンテーションは、メンバー同士の共同作業を阻害する面もあり、部局を超えたメンバーの交流もこのプログラムの大きな目標であるので、この点注意が必要だ。

同じ日程と会場で、並行して「FDリーダーワークショップ」が行われたが、このメンバーとの討議、意見交換が必要と考えられる。つまり、リーダーワークショップで検討された徳島大学の教育やFDの理念と、基礎プログラムで行った授業実践のための実際的プログラムが

どうつながるのかといった点、また、他大学等から赴任された教官に対して、全学共通教育など、徳島大学の教育の特色を示し、討議を通じて認識を共有する必要があると考えられる。

プログラムの過密さと会場の問題は引き続き検討課題である。

次年度のFD基礎プログラムに向けての課題
最近実施した学生に対するアンケートを見ると、徳島大学の先生は、熱心に授業をする先生とそうでない先生、授業実践力のある先生とない先生がはっきり分かれるというコメントが少なからずあった。「FD基礎プログラム」の目的は、授業に対する熱意と実践力のある教官を増やすことによって、徳島大学の教育の全体的レベルアップを目指すところにある。これは一朝一夕に達成できるものではなく、長期的展望をもって持続的に取り組むべき課題であることを第一に自覚しなければならない。その上で、各年度により一層の成果をあげて行くためには、これまでに指摘した点を勘案して次年度のプログラムを検討しなければならない。

実施に向けての課題としては、大学開放実践センター教官を中心とした実施メンバーの力量を上げるとともに、運営の面で一層入念な準備をする必要がある。

3-2.FD リーダーワークショップ

FD リーダーワークショップは、各部署におけるFD推進リーダー(教務委員、FD専門委員)を対象に、平成15年6月7(土)～8(日)の両日、国立淡路青年の家を会場に実施した。

ワークショップの対象がベテラン教員であることから、同時に実施した新任教員対象の基礎プログラムとは別個に次のようなねらいを設定し、本学のFD推進にかかる課題の解決をはじめ、上級のテーマを設定して、全学的見地からの課題解決の方策を探った。

なお、ワークショップでは、12名のFDリーダーを2グループに分け、全部で9つのセッションを行った。この内、5つのセッションでは、与えられたインストラクションと資料を

基に、それぞれアウトプットを作成し、発表した。

番号 A-2003-	氏名	所属
10-1001	荒木秀夫	総合科学部
10-1002	桑原類史	総合科学部
10-3001	吉崎和男	医学部
10-4001	羽地達次	歯学部
10-4002	中條信義	歯学部
10-5001	高石喜久	薬学部
10-5002	福井裕行	薬学部
10-2002	本仲純子	工学部
10-2003	田中均	工学部
10-1003	桑折範彦	全学共通教育センター
10-3002	近藤裕子	全学共通教育センター
10-8001	大恵俊一郎	高度情報化基盤センター
10-8002	金西計英	高度情報化基盤センター
10-6001	廣渡修一	大学開放実践センター
10-6002	曾田紘二	大学開放実践センター
10-6003	森和夫	大学開放実践センター
10-6004	森田秀芳	大学開放実践センター
10-6005	若泉誠一	大学開放実践センター
10-6006	川野卓二	大学開放実践センター
10-6007	宮田政徳	大学開放実践センター
特別参加	佐藤浩章	愛媛大学

ねらい

各部署の教務委員、FD専門委員等がこのプログラムに参加することによって、

- 徳島大学FDの課題について、他大学FD活動と比較して理解し、その解決策を提案できる、
- 本学の教育理念について、外国の事例と比較してその異同を指摘できる、
- 本学の対学生サービス基準について、他大学及び大学基準協会の基準を参照にしつつ作成できる、
- 本学の対社会サービス基準について、大学基準協会の基準等を参照にしつつ作成できる、
- 新任教官の策定した共通教育科目について、改善促進の視点から助言できる、
- FDリーダー間の仲間づくりができる、ことをねらいとする。

プログラム

2日間の日程は次の通りである。

FD リーダーワークショップ日程
第1日(2003年6月7日・土曜日)プログラム

9:30 国立淡路青年の家に到着・記念写真撮影

時刻	内容	場所
9:30 - 10:00	・鍵の受け渡し、部屋の確認	特別第1研修室
10:00 - 10:30	(1)オリエンテーション ・徳島大学とFDへの期待、新任教官への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介	特別第1研修室修室
10:30 - 12:10	(2)WS=「徳島大学FDの当面の課題とその解決」について	3階会議室
12:20 - 13:00	昼食(12:00-12:20) 休憩	食堂
13:00 - 13:50	(3)講義「FDとは何か、何が求められているか」 (愛媛大学) 佐藤浩章 ・国立大学におけるFDとは何か ・愛媛大学のFD・SDの現状と課題	特別第1研修室
14:00 - 15:30	(4)WS=「愛媛大学FD・SDから学ぶこと」 「徳島大学FDの当面の課題とその解決」について	3階会議室
15:30 - 18:00	(5)WS=「徳島大学の教育理念とその具体化」について	3階会議室
18:00 - 19:30	夕食 風呂他	食堂・浴室
19:30 - 21:00	(6)WS=「徳島大学の対学生サービス基準」について	3階会議室
21:00 - 22:00	懇親会	特別第1研修室
22:00	消灯	宿泊室

第2日(2003年6月8日 日曜日)プログラム

時刻	内容	場所
- 7:10	朝の散歩	吹上浜
7:10 - 7:20	朝の集い	つどいの広場
7:30 - 9:00	朝食(7:30-7:50) 8:45 部屋点検・退室	食堂
9:00 - 11:50	(7)WS=「徳島大学の対社会サービス基準」について	3階会議室
12:00 - 13:00	昼食(12:00-12:20) 休憩	食堂
13:00 - 15:30	(8)演習「授業づくりと教材研究」発表会 [15分発表+討議・検討10分]×3G ・授業研究会の進め方 ・講評と改善ポイント	特別第1研修室
15:30 - 15:50	コーヒープレイク	
15:50 - 17:00	(9)終わりのWS=「プログラムのまとめ」 ・学習したこと、得たこと・これからどう仕事に生かすか・グループの解散式 (10)リーダーワークショップ討議結果報告(報告者から) (11)アンケート (12)おわりの言葉、青年の家からの挨拶	特別第1研修室
	17:00 バス発車→18:00 常三島キャンパス着	

ワークショップの実際

ワークショップは、次のようなインストラク

ション・マニュアルに即して実施した。参考までに、ワークショップの進め方に関するインス

トラクション、第1番目のワークショップに関するインストラクションを掲載しておこう(詳細は本学FDに関するHPを参照されたい)。

FDリーダーワークショップの進め方

(1) FDリーダーワークショップでは、全部で9つのセッションを予定しています。この内、いわゆるワークショップ形式で課題に対するアウトプットを作成するセッションが合計5つ用意されています(しおりの背景が白のセッション)。

(2) これらのセッションについては、それぞれに「インストラクション」が配布されます。ワークショップでは、この他に別途用意した「FDリーダーワークショップ資料」が必要です。「インストラクション」の指示に従って、「資料」を読み、それぞれについてのアウトプットを作成し、それらを発表し合ってFDに対する相互の認識を高めるのが狙いです。本プログラムの趣旨をご理解くださり、ご協力のほどお願い申し上げます。グループ分けについて参加者を次の2つのグループに分けさせていただきます。グループは、最後のセッションまで同じメンバーです。

■グループ分け(敬称略)A班：荒木、吉崎、中條、福井、田中、近藤、B班：桑原、羽地、高石、本仲、桑折、大恵

■役割分担について：各グループでは次のような役割を決めます。セッションごとに相互に交代しながら行ってください(1セッション3名)。

役割：司会(A)(B)

記録(A)(B)

全体討議発表(A)(B)

■その前に：2日目の「プログラムのまとめ」における発表者をお2人選びます。各グループでじゃんけんをして、最後に勝った人がこの大役を務めます。

(A)(B)

■それでは、一番目のワークショップに入ります。

2日間を通じて、大学開放実践センターの廣渡と高度情報基盤センターの金西が進行役を務めます。

1番目のワークショップに関するインストラクション

第1日目：6月7日(土)10:30-12:05

(1)ワークショップの課題は次の通りです。

⇒(2)WS=「徳島大学FDの当面の課題とその解決」について

A・Bグループごとに5分間のプレゼンテーション用シートを作成します。

(2)時間配分は次を参考にしてください。

10:30-10:35

本時の狙いと進め方に関するインストラクション(廣渡)

10:35-10:40

グループ分けと役割分担の確定

10:40-10:45

基礎資料の5分間リーディング

基礎資料：「全学FD推進プログラムの成果とこれから」

10:45-11:15

ワークショップ①：当面の課題について(カード式発想法による課題の抽出と分類・整理・プレゼンテーション用シートの作成)

11:15-11:45

ワークショップ②：解決法について(カード式発想法による解決法の抽出と分類・整理・プレゼンテーション用シートの作成)

註：ワークショップ①・②は続けても構いません。

11:45-12:00

全体討議(プレゼンテーション用シートに基づくグループ発表と討議)

(司会:廣渡)

全体討議の進め方

Aグループ発表5分、Bグループ発表5分 発表に関する質疑応答 5分

午後のプログラム及び昼食に関するインストラクション(廣渡)

成果と課題

ワークショップでは、インストラクションに基づいて参考資料(総計40ページ分)を読了し、カード式発想法により課題の抽出と分類・整理を行った。また、これに基づいてOHPシートによるグループ発表と質疑応答、意見交換を行った。最後まで全員集中力を持続して参画し、充実した内容の成果を発表できたが、直後アンケートによれば、次のような課題が指摘されている。

a.プログラム内容について

十分に考える時間がない;より実践的なものが良い;;討論を深めるのが不十分;結論が表面的で不満足;具体的な方策がかけていた;テーマを絞る 等々

b.運営について

時間的に少しハード;基礎とリーダーの結びつきがもっとほしい;計画としては少しタイト;少し不慣れ 等々

c.会場について

宿泊場所としては不適切;サービスが悪い;安価でよいが、教官の会場としては寂しい;食事はこれが限界 等々

d.全体的な印象

トークキングの時間が足りない;自由時間が少ない;ワークショップの目的・意義が理解できない;メニューが多すぎる;リーダーと新任教官が共通のテーマでプロダクトを出すの難しいのでは 等々

これらの意見を見る限り、今後は、全体にもっとゆったりとした余裕のあるプログラムに改変することによって、参加者が自ら考える時間、並びに新任教員と交流する時間等を確保すべきであろう。会場選定の問題とあわせて、次年度の課題としたい。

3-3.FD 推進ハンドブック作成ワークショップ経緯

FD 推進ハンドブックワークショップは、平

成15年9月26日(金)9:30-17:00、大学開放実践センター第1講義室を会場に開催した。

第2号に当たる『FD 推進ハンドブック』の構成は、次の通りであり、センター教員による「徳島大学全学FDハンドブック」制作推進チームが作成した原案を下敷きにして、各部局から選出されたFDリーダーを4つの制作グループに分け、内容・構成等の検討を行った。

第5巻 ビジュアル教材作成ハンドブック

第6巻 プリント教材の作り方・使い方ハンドブック

第7巻 テスト問題・レポート課題作成ハンドブック

第8巻 授業評価アンケートの作り方・フィードバックの仕方ハンドブック

プログラムとメンバー

ワークショップの詳細並びに各制作グループのメンバーは、次の通りである。

制作グループメンバー(○印:責任執筆者)

第5巻 森田秀芳(大学開放実践センター)、伏見賢一(総合科学部)、谷憲治(医学部)、中條信義(歯学部)、森和夫(実践センター)

第6巻 若泉誠一(実践センター)、野間隆文(歯学部)、桑原淳(薬学部附属医薬資源教育研究センター)、金西計英(情報化基盤センター)、栗栖聡(共通教育センター・総合科学部)

第7巻 宮田政徳(実践センター)、土屋浩一郎(薬学研究科)、竹内敏己(工学部)、上田哲史(情報化基盤センター)

第8巻 曾田紘二(実践センター)、長積仁(総合科学部)、寺嶋吉保(医学部)、井上哲夫(工学部)、佐竹昌之(共通教育センター・総合科学部)

成果と課題

ワークショップ開催後、作業部会による数次の検討会を経て、平成16年1月に刊行、直ちに全学の教員に配布した。

昨年度の制作経験が功を奏し、作成手順に関しては熟練化したが、各種文献やホームページ検索等々の基礎作業、様々な意見を集約しつつ内

容を修正する編集作業には多くの時間と労力を費消した。第3号の刊行に向けては、どのようなテーマ設定が妥当かという問題に加えて、作業量全般の合理化・見直しが課題となろう。

また何よりも、本書が実用に耐える内容であるか、どの程度活用されているかに関して、その評価や実態を調査し、本事業自体の自己点検・評価を実施する必要がある。

F D推進ハンドブック作成ワークショップ日程表

平成15年9月26日(金)プログラム

時刻	内 容	分 担
9:30~10:30	(1)オリエンテーション ・ 自己紹介と今日のプログラム ・ ワークショップのねらいと意義・進め方 ・ スタッフ紹介 (2)グループワーク作業分担と概略説明 「ビジュアル教材作成」ハンドブック 「プリント教材の作り方・使い方」ハンドブック 「テスト問題・レポート課題作成」ハンドブック 「授業評価アンケートの作り方・フィードバックの仕方」ハンドブック	(1)進行＝廣渡 (2)曾田、森田、若泉、宮田、森
10:30~12:00	(3)WS＝課題作業の推進＝検討	(3)曾田、森田、若泉、宮田、森
12:00~13:00	昼 食	
13:00~15:00	(4)WS＝課題作業の推進＝検討と入力	(4)曾田、森田、若泉、宮田、森
15:00~15:20	休 憩	
15:20~16:30	(5)WS＝課題作業の推進＝出力・点検・印刷	(5)曾田、森田、若泉、宮田、森
16:30~17:00	(6)WS＝「課題作業成果の発表と検討」 「ビジュアル教材作成ハンドブック」作成 「プリント教材の作り方・使い方ハンドブック」作成 「テスト問題・レポート課題作成ハンドブック」作成 「授業評価アンケートの作り方・フィードバックの仕方ハンドブック」作成 (7)おわりの言葉	(6)進行＝廣渡 (7)廣渡

3-4. FD 応用プログラム

6月に実施したFD基礎プログラム内容を受けて、新任教員が行う実際の授業に適用し、その成果を検討し合うのがこのFD応用プログラムである。本年度はスケジュールの調整等で常三島地区では4回、蔵本地区では1回実施した。この授業研究会は授業を準備し、実施した新任教員にとっても、参加した教員にとっても各々が授業力を向上させるための、また授業を改善させるための必要な点を多数学ぶことができ、充実した時間とすることができた。

ねらい

この応用プログラムの到達目標は次の4点とした。

- (1) 授業の検討を行い、良い点を学び合う。
- (2) 授業研究の進め方を実践できる。
- (3) 授業改善の着眼点を持ってポイントを指摘できる。
- (4) 学習者中心の授業とは何かを実践的に理解する。

開催期日及び場所、検討授業内容

開催時期は2003年12月～2004年1月で、研究会は4時間程度とし、参加する新任教員の数によって流動的に設定する方針を立てた。なお、開催場所は学部教室・会議室などで都合の良い所で行うこととした。

実際には下表のように実施した。

日 時	平成15年12月1日(月) 13:30-16:40
場 所	大学開放実践センター第2講義室(1階)
授業科目	勝藤和子(総) 「英米言語研究Ⅲ」 石田和之(総) 「経済学(経済学Ⅰ)」 山本真由美(総) 「生涯発達心理学」
司 会	宮田政徳(実セ)
日 時	平成15年12月2日(火) 15:00-17:10
場 所	大学開放実践センター第2講義室(1階)
授業科目	波場直之(総) 「相対性理論・時空と宇宙の科学」 吉田敦也(実セ) 「遠隔学習でホームページを作ろう(公開講座)」
司 会	曾田紘二(実セ)
日 時	平成15年12月15日(月) 9:00-11:55
場 所	大学開放実践センター第2講義室(1階)
授業内容	佐藤高則(総) 「生物学(生命の科学Ⅰ)」 関澤 純(総) 「化学(生きるために大切な化学の知識)」 鈴木和雄(総) 「自然観察入門」
司 会	若泉誠一(実セ)
日 時	平成15年12月16日(火) 13:30-16:40
場 所	歯学部第2講義室(2階)
授業内容	弘田克彦(歯) 「細菌学」 雄西智恵美(医) 「高齢者援助論」 野間隆文(歯) 「生化学」
司 会	森田秀芳(実セ)
日 時	平成16年1月9日(金) 13:30-16:50
場 所	大学開放実践センター第2講義室(1階)
授業内容	矢部拓也(総) 「地域社会研究Ⅰ」 衣川 仁(総) 「日本史研究Ⅱ」 岸原健二(医) 「免疫学」
司 会	森 和夫(実セ)

対象者

FD 基礎プログラムを受講した新任教員を対象者とし、開催される授業研究会の中で1回は発表することにした。

発表者は下表のように、FD 基礎プログラム参加者 18 名中の 14 名であった。

注) 表中の番号は修了証番号である。

番号 A-2003-	氏 名	所 属
30-1001	山本真由美	総合科学部
30-1002	関澤 純	総合科学部
30-1003	鈴木和雄	総合科学部
30-1004	石田和之	総合科学部
30-1005	波場直之	総合科学部
30-1006	勝藤和子	総合科学部
30-1007	衣川 仁	総合科学部
30-1008	矢部拓也	総合科学部
30-1009	佐藤高則	総合科学部
30-3001	雄西智恵美	医 学 部
30-3002	岸原健二	医 学 部
30-4001	野間隆文	歯 学 部
30-4002	弘田克彦	歯 学 部
30-6001	吉田敦也	大学開放実践センター

内容と進め方

FD 基礎プログラム参加者の担当する授業科目の中から、検討する授業について 90 分程度(医学部は 60 分)の内容をビデオに収録した。この映像を授業検討会の司会者が、発表者の了解のもとに授業の様子が分かるように約 20 分程度に編集し、MPEG ファイルに変換した CD-ROM を作成した。編集しない場合にも、授業検討会でビデオ映像にランダムアクセスできるように準備した。この後に、授業検討会で討議参加者と共にビデオと資料(シラバス、授業計画、指導案、教材等)を研究討議した。なお、検討会は「FD 推進ハンドブック」を参考にして運営した。この検討会の模様はビデオによって記録し、デジタルビデオとして保存している。

授業研究会参加者

授業研究会の案内は、FD 基礎プログラム参

加者および FD リーダーワークショップ参加者に電子メールで届け、また各学部等の教員にも参加の呼びかけを大学教育委員会等を通して行った。

参加者は次表の 23 名であった。昨年度の参加者 35 名と比べ減少している。この減少が何を意味しているのか現時点では定かでないが、今年度は工学部と薬学部に FD 基礎プログラム対象者がいなかったことも影響しているように思われる。

注) 表中の番号は修了証番号である。

番号 A-2003-	氏 名	所 属
30-1001	松下正行	総合科学部
30-1002	宮崎隆義	総合科学部
30-1003	佐竹昌之	総合科学部
30-1004	中島浩二	総合科学部
30-1005	桑原類史	総合科学部
30-2001	竹内敏己	工 学 部
30-2002	田中 均	工 学 部
30-3001	寺嶋吉保	医 学 部
30-3002	有持秀喜	医 学 部
30-3003	森口博基	医 学 部
30-4001	吉本勝彦	歯 学 部
30-4002	羽地達次	歯 学 部
30-4003	金森憲雄	歯 学 部
30-4004	石川康子	歯 学 部
30-4005	赤松徹也	歯 学 部
30-4006	飯田博一	歯 学 部
30-4007	小杉知里	歯 学 部
30-6001	廣渡修一	大学開放実践センター
30-6002	曾田紘二	大学開放実践センター
30-6003	森 和夫	大学開放実践センター
30-6004	森田秀芳	大学開放実践センター
30-6005	若泉誠一	大学開放実践センター
30-6006	宮田政徳	大学開放実践センター

成果 FD 応用プログラムの到達目標に対する達成度

[到達目標 = 授業の検討を行い、良い点を学び合う]

実際の自分の授業をビデオで見る機会はほとんど無いのが現状である。発表者自身がビデオの自分の授業の様子を見て、様々気付くこと

が授業改善の第一歩となる。また、参加者はその授業の良い点を学び、自分の授業の改善に役立てることができる。さらに、発表者は自分の授業の改善をしたいと望んでいるので、参加者が問題点を指摘した上で、それを改善するためにはどのようにすればよいかの意見を出し合うことも重要となる。

この点から見ると、今年度の授業発表は様々なものがあり、それぞれ学生の理解を深めるための工夫が見られた。また「双方向的な授業をどのように実現して行くか」では、それぞれの分野で悩みながら努力されている様子が見られた。また、板書とプリント中心の授業も授業分野(内容)やそのやり方によっては、学生の満足度の高い優れた授業になることが示された。

「優れた授業は、周到な準備なしには不可能である」との認識では、一致しているように思われる。

[到達目標 = 授業研究の進め方を実践できる]

授業研究会を企画し運営する力量は、今後のFDの具体的活動を展開する上で重要となるため、このFD応用プログラムを実践の機会として位置づけている。また、誰が行っても授業研究会を運営できるよう、「FD推進ハンドブック」1号の第4巻に「授業研究会運営マニュアル」を載せてある。実際に自分の授業場面や内容について研究討議することで、授業研究の方法については認識を深めたと推察される。しかし、昨年度には見られた「自分の授業の検討が行われない授業研究会への参加」が、今年度は無かったのが残念である。

[到達目標 = 授業改善の着眼点を持ってポイントを指摘できる]

参加者が自らの経験をふまえた「授業の改善に何が重要であるか」の指摘は的を得ていることが多く、「授業エキスパート」の参加者が多いほど授業改善のポイントを発表者は学ぶことができるように思われる。また、発表者自身が自分の授業のビデオを見て、反省点を把握し

述べている点は、授業力の向上という面で心強く、また「授業研究会運営マニュアル」が役立っていることが窺われた。FD基礎プログラムで培った内容が形を変えた環境下でも十分に発揮できるように、この研究会をさらにレベルアップしていくことが重要である。

[到達目標 = 学習者中心の授業とは何かを実践的に理解する]

この到達目標は授業研究会を貫く基本事項とあって良い。この項目については、5回にわたるいずれの授業研究会でも発表授業により程度の差はあるものの議論されていた。参加者、発表者の双方に「学習者中心の授業」をどのように実現して行くかを試行錯誤的に努力している様子が窺えた。また、学生自らが「課題の調査を行い、その結果をまとめ、皆の前で発表する」授業も発表されている。今後このような授業が多くなった時、大学教育全体にどのような効果(影響)が出てくるのかも見て行く必要がある。

計画から実施までの経過と改善について

平成14年度FD実施報告書で示されているのと同様に、FD応用プログラムの実施計画作成時点での問題は、発表者の応諾の時期と授業実施の時期である。今年度の応用プログラム対象者が18名であったのに対し、実際に授業のビデオ撮影と授業研究会での発表者となることを応諾された方は14名であった。この応諾を得るのにあたっては、メールのやり取りは無論、様々な方法で理解と協力を要請することが少なからず必要であった。授業の質的向上には自発的、自主的に授業研究そのものが運営されることが重要である。この部分のコンセンサスが確立するまでは、このような活動は必要不可欠ではあるものの、忍耐と時間のかかる仕事となっている。

また、授業研究会を実施する上で解決すべきテクニカルな問題が昨年度の報告書でいくつか挙げられていた。その中で今回かなり改善された点は、撮影した90分(医学部は60分)

授業のビデオから20分程度の説明で授業全体の理解ができるよう、発表者と大学開放実践センター教員が事前に連絡を取り、MPEGファイルに変換してDVDもしくはCD-ROMを作成し、授業研究会を行った点である。MPEGファイル作成とメディアの作成は、非常に時間はかかるが、授業研究会をスムーズに進める上で役立った。しかし、時間が非常にかかるので、授業撮影時にビデオカメラをDVDレコーダーに接続し、直接DVDを作成し、それを編集して約20分のビデオを作成することを考えた方が良いと思われる。

次年度のFD応用プログラムに向けての課題

これまでの2回のFDプログラム実施により、「大学全体として教育力の向上を目指している」という意識面で各教員に少なからぬ影響を与えていると同時に、FD応用プログラムの実施により、参加者全員の授業改善に大いに役立っていると確信している。その一方で、FDの各種プログラム参加者の顔ぶれが固定する傾向が既に見られ、FD活動の広がりや充分とはいえない状況であるように思われる。

このような状況の下で、FD応用プログラムを質的に向上させるための4つの提案をしたい。

1)FD応用プログラム参加者が増えるような仕組みを考える

今年度は授業研究会発表者が、別の授業研究会に参加をしていないため、授業の検討を進めて行く方法を充分学べているかどうか疑問が残ると同時に、他の発表者の授業の優れた点を学ぶ機会を失っているように思える。また、FD基礎プログラムには参加したものの自分の授業発表を行わなかった教員が、後の授業研究会に全員不参加であった状況に対しては、大学全体で教育力の向上を目指す上では、何らかの対応を講じる必要があると考える。

2) 授業研究会の内容の充実

まず、司会者は配慮すべき要因を理解しておく必要がある。前回の報告書でも挙げられていたが、発表者がスケープゴートのように感じ

たり、発表者が被害者意識を持つことは授業研究本来の主旨に反するものである。従って、発表者の心境や努力に対して敬意を払い、尊重することが大切である。また、逆に配慮しすぎることで議論が薄い内容に陥らないようにしなければならない。実施したことで「よし」とするのではなく、実施した内容の水準が一定以上にならなければ意義、意味のないことである。

これらのことを理解した上での議論を進めて行くには、司会者の他に発表者に近い分野のいわゆるFDエキスパートの人が授業研究会に参加し、議論の方向を整理していける状況を作ることも効果的方法と考える。この面での各学部等の一層の支援が望まれる。

3)「良い授業の法則性」を明らかにしていく活動

授業研究会(合計24の授業発表)でのやりとりを記録して保存している。今後もこれらのプログラムの記録が蓄積されて行くことになるが、来年度はFDプログラム第1期計画の最終年度となるので、「良い授業の法則性」を何らかの形でまとめることが必要である。

4) 大学内の授業研究ネットワーク

新任教員が孤立して孤独に授業を改善すると言うことは、かなり困難で時間を要する。したがって、新任教員がスムーズに授業力を向上できる環境を準備することが重要であり、このことは徳島大学全体の教員の授業力向上を目指す上でも大いに役立つ。そのためには、彼らの抱える授業を行う上での悩みや問題解決のための支援ネットワークを築くことを考えなくてはならない。これには大学教育委員会が中心となって、その活動ができる体制を構築していく必要がある。

これらの課題を解決することがFD応用プログラムの充実と徳島大学全体としての教育力の向上に貢献することは明らかである。

3-5.FDシンポジウム

FDシンポジウムは、一年間の全学FD推進プログラムの総括として実施するものである。

今年度は、昨年度同様、年が改まった1月下旬に常三島と蔵本の両会場で開催した。以下、それぞれのプログラム、成果、課題等について記す。

3-5-1.常三島会場 プログラム

常三島会場では、メインテーマを「学生をその気にさせる授業づくり」として、平成16年1月21日(水)14:00-17:00、工業会館メモリアルホールにて実施した。

内容構成に当たっては、次のような趣旨のもと、4つの目標を立てた。

<趣旨>

学生の学習意欲の減退、学力の低下が叫ばれている昨今、学生や保護者、更には社会に対する大学サイドにおけるアカウンタビリティが問われている。学生が社会に出ても恥ずかしくない(大学にふさわしい)程度の知識・技能・態度を身につけさせることは、ユニバーサル段

階に達した大学の今日的責任であり、緊喫の教育的課題と言わねばならない。

このシンポジウムでは、そのための前提として、学生の動機づけをどう図るか、授業をどのように工夫するかについて、教員による具体的な実践報告を基調としつつ、学生自身による体験報告も加味しながら、明日からの授業に应用可能な方法を探る。また、そのことを通じて、本学における個々の教員の教育力の向上を図る。

<目標>

- ①優秀な実践例を聞き、応用可能な方法論を抽出する。
 - ②学生の体験を聞き、授業を見つめなおすヒントを得る。
 - ③早速明日からの授業に活かす。
 - ④授業の向上を目指す仲間ができる。
- これらの目標に沿って、全体プログラムを次のように設定した。

常三島キャンパス会場プログラム

日時:平成16年1月21日(水)14:00-17:00 会場:工業会館メモリアルホール

テーマ:「学生をその気にさせる授業づくり」

日 程:

時 間	内 容
14:00~14:05	開会(総合司会:大学開放実践センター長 廣渡 修一)
14:05~14:15	開会のことば(学長 青野 敏博)
14:15~14:45	学生による授業体験-その紹介-
14:45~16:30	ビデオフォーラム及び全体討議 講 師 総合科学部(教授 日置 善郎) 工 学 部(助手 三宅 正弘) 司 会 大学開放実践センター長 廣渡 修一
16:30~16:45	FD実施状況報告 報告者 総合科学部(教務委員会委員長 荒木 秀夫) 工 学 部(FD委員会委員長 佐藤 恒之) 全学共通教育センター(FD教育方法部会長 近藤 裕子)
16:45~16:55	徳島大学FD推進ハンドブック紹介 紹介者 大学開放実践センター助教授 宮田 政徳
16:55~17:00	まとめ・閉会のことば(副学長 川上 博)

なお、「学生による授業体験—その紹介」では、事前に共通教育科目の学生によるワークショップを2回にわたって実施し(「よい授業、よい教師」「わるい授業、わるい教師」)、その要点をパワーポイントにまとめて学生の代表2名が発表した。

次に「ビデオフォーラムと全体討議」では、各部局における学生による授業評価点の高い教員の授業をビデオ撮りし、その映写と教員によるコメント、それに基づく全体討議を実施した。

「FD 実施状況報告」では、3部局の本年度の取り組みについて発表した。最後に、「徳島大学FD推進ハンドブック紹介」では、ハンドブック第2号の内容についてその要点を報告した。

成果

シンポジウム参加者は、次表の通りである。

学長	1
副学長(教育担当)	1
総合科学部	20
医学部	4
工学部	21
大学開放実践センター	6
高度情報化基盤センター	1
学生	2
合計	56

課題

最後に、シンポジウムの課題についてまとめておこう。

ビデオフォーラムにおける授業ビデオは、それぞれの教員の持ち味が特異的に現出したものであったため、インパクトはそれなりに大きかったように見える。古典的な講義式授業(物理学)と、プロジェクト型授業(景観デザイン論)という対照的な授業風景を実見できたことは、シンポジウム参加者の日常の授業への取り組みに対して示唆するところ大であったと思われる。

また、学生による授業体験発表についても、多少プリミティブな点はあったとしても、学生

自身の口から生の声を聞く機会を得たこと、学生と教員との意見交換ができたという点で有意義であったと思われる。

しかしながら、問題の一は、教員側と学生側の視点や論点が十分論議され尽くしたとはいえないこと、「学生をその気にさせる授業づくり」というメインテーマに関して、一定の共通理解を得るまでには遠く及ばなかったことが挙げられる。シンポジストによる事前の打ち合わせが、諸般の事情により開催できず、いきなり本番に臨んでしまったこともその要因の一つと言えよう。

第二の問題は、昨年度に比べて参加者が減少した点である。昨年度の76名から56名へと20名も減少した。蔵本会場も同様であるが、日程の設定や内容のマンネリ化、参加者の固定化等々、次年度に向けて課題が大きいことが判明した。

第三は、授業改善に関する仲間作りができなかったことである。参加者とシンポジストとの質疑応答だけでは、この点の進展は難しい。参加者同士の交流やグループ化をどう図るかが、今後問われよう。

総じて言えば、2年目のFDシンポジウムは、内容・方法上の洗練化と同時に、スケジュール化・マンネリ化したあり方からの脱皮という課題を残した。

3-5-2.蔵本会場

プログラム

次頁にプログラムを示した。

蔵本キャンパス会場プログラム

日時：平成16年1月28日(水) 14:00-17:00 会場：医学部臨床第1講堂

テーマ：「学生の期待する教員像にどう応えるか」

日 程：

時 間	内 容
14:00～14:05	開会 (総合司会：大学開放実践センター教授 森 和夫)
14:05～14:15	開会のことば 学長 青野 敏博
14:15～14:45	学生による体験発表
14:45～16:30	シンポジウム「学生の期待する教員像にどう応えるか」 講 師 医学部講師 寺嶋 吉保 歯学部講師 大石 美佳 薬学部教授 樋口 富彦 司 会 大学開放実践センター教授 森 和夫
16:30～16:45	FD実施状況報告 報告者 医学部(教務委員会副委員長) 安友 康二 歯学部(教育推進会議FDワークショップ部会長) 中條 信義 薬学部(教務委員会委員) 福井 裕行
16:45～16:55	徳島大学FD推進ハンドブック紹介 紹介者 大学開放実践センター教授 若泉 誠一
16:55～17:00	まとめ・閉会のことば 副学長 川上 博

成果

参加者は、昨年度の96名に比べて減少した。

学長	1
副学長(教育担当)	1
総合科学部	1
医学部	18
歯学部	25
薬学部	7
工学部	1
実践センター	5
学生	1

課題

シンポジウム「学生の期待する教員像にどう応えるか」では、薬学部「第4回薬学教育の改善を目

指した学生対象ワークショップ報告書」、平成15年4月刊から抜粋して再整理したものを紹介した。次に「第2回歯学部FDワークショップ」平成15年10月実施の成果から学生達の作品「We Love 先生」をビデオ映像で紹介した。さらに医学部の4年生、3年生と共に行った「理想のチューター・ワークショップ」、平成15年11月実施の作業成果を学生によるプレゼンテーション映像で紹介した。この後に、これらを教員としてどう分析するか、どう理解したらよいか、どう判断すればよいかについて討議した。ここでは納得のいく意見も多いが、重要なことはそれらの背景にあること、理由と言ったものをきちんととらえ直し、反省の上で授業に反映させることが確認された。個々の教員が短期的な取り組みですぐにでも解決できるこ

とがあまりにも多くあることが指摘された。次に「学生の期待に応えるための基本的な考え方は何か」、「私はこう実行したい(具体的な教育の方法やその行動とは何か)」を各シンポジストからの提案を伺い、会場参加者の意見も交えながら集約した。その結果、学生をアクティブにさせる考え方や、学生の考え方を引き出しながら行う方法などを随時取り入れて、「授業わかりやすくする努力」が欠かせないものと提案があり、チュートリアルの中にも適宜、反映させることで成果が予想できることなどを確認した。これらの工夫や改善の方向を確実に展開されることを期待したい。

4. 今年度の成果と課題

(1) 全学的な FD 実践、軌道に乗る

今年度は平成14年度から始まった3ヶ年計画である第1期全学FD推進プログラムの2年目であった。成果としては、全学FD活動が、新任教官に対するFD基礎プログラムと応用プログラム、FD推進リーダーによるワークショップ、FD推進ハンドブック作成ワークショップとハンドブックの刊行、年度の全学FD活動の各企画を集約するFDシンポジウムの開催という1年目と同じルーチンで行われ、全学FD推進プログラムがこの2年間で軌道に乗ったことである。これが今年度の最大の成果だと思われる。「継続は力なり」と言うように、この全学FD推進プログラムを今後も継続していくことが、徳島大学における全学FD実践の流れを定着させていく要となる。

この第1期プログラムの最初の2年間である平成14-15年度にFD基礎プログラムに参加した新任教官は計41名、そのうち、応用プログラム・授業研究会で発表した教員は24名であった。このようにこのプログラムを続けていけば、数多くの新任教官がFD基礎プログラムと応用プログラム・授業研究会を経験し、その蓄積によって徳島大学の授業力、ひいては教育

力が確実にアップするであろう。

(2) 授業を意識化することの重要性

徳島大学で学部を超える全学的規模で行われた「学生による授業評価」は、平成9年に全学共通教育の授業に対して行われたものが最初ではなかったかと思われる。そのとき、多くの教員はその結果を、他者の目から見た自分の授業がこんなふうであったのかと驚きと感動の気持ちで受け取ったのではなからうか。

今年度のFD応用プログラム・授業研究会でも、授業発表者の間から、自分の授業をビデオという他者の目から見て、「自分の授業はこんなのであったのか」とか「黒板に書いている自分の字が小さいことが初めてわかった」などという感想が寄せられていた。

このように、自分の行っている授業を意識化することは、授業の改善にとって大切なことである。また、授業をビデオに撮り、授業研究会で発表するにあたり、普段の授業方式とは異なった方法を取り入れたり、学生とのコミュニケーションを意識的に取り入れるなど、工夫を凝らしたとのことであったが、このような経験が今後の授業で生きてくると思われる。

この意味から、FD基礎プログラムに参加した教員はできるだけ全員、応用プログラム・授業研究会で授業発表し、他の教員の授業研究会にも出席して発表者の授業の優れた点を学び、授業の検討を進めていく方法を学んでもらうこと、また、経験を積んだベテラン教員にも助言のために授業研究会に参加してもらう方策を講ずることが必要である。

(3) FD シンポジウム

授業を意識化するということでは、1月に常三島キャンパスと蔵本キャンパスで開催された全学FDシンポジウムのテーマ、「学生をその気にさせる授業づくり」と「学生の期待する教員像にどう応えるか」が、これまで学部FDでは取り上げられ、議論されてきたことであるが、今の時代の大学教育において最も重要なこ

のテーマが全学レベルで取り上げられたことは大きな意義があった。このテーマを基軸にして教員間の学内FDネットワークが作られていけば、授業の改善、教育力の向上という面で将来大きな成果が出てくるであろう。

(4) FD 推進ハンドブックの活用

大学開放実践センターのFD作業部会は、全学から参加した各部局の教員とともに、「徳島大学FD推進ハンドブック」の第2号を、大学教育委員会の監修のもとに編集・刊行した。平成14年度に発行した第1号とあわせて、「シラバスの作成の仕方」、「わかりやすい講義の仕方」、「よりよい成績評価の仕方」、「授業改善のための授業研究会運営」、「ビジュアル教材作成」、「プリント教材作成」、「テスト問題・レポート課題作成」、「授業評価アンケートの作り方・フィードバックの仕方」の8巻のハンドブックに及んだ。このハンドブックはその準備、内容の検討、執筆に、2年間とも5ヶ月近い期間と労力を費やした珠玉の結晶である。

これを学部FDにおいても積極的に活用し、また個人の教員においても大いに参考にして授業の準備や改善に利用していただきたい。こ

のことが、平成16年度から始まる国立大学の法人化を、徳島大学が教育の面において乗り切っていく手立ての1つになると信じている。

(5) FD 大学間ネットワークの構築

6月のFD基礎プログラムで愛媛大学の佐藤浩章先生に「FDとは何か、何が求められているか」という題で講演をしていただいた。この交流をとおしてFD大学間ネットワークが構築され、第1回FD大学間ネットワーク会議が愛媛大学で、徳島大学、香川大学、高知大学、名古屋大学の参加のもとに開かれたのは画期的な成果であった。また、徳島大学から、各地の大学等で開かれたFDのシンポジウムに参加して交流を深めた。

また、本学のホームページに「FDが結ぶ徳島大学・教育ネットワーク」というFDのページを設け、絶えず学内のFDの取組みや行事等の最新情報を載せて、学内のFDの交流をはかっている。

最後に、このFD推進プログラムを進めるにあたり、ご協力、ご支援いただいた関係者の方々に感謝いたします。

